

# 「聞き返し」における「問題」の捉え方

## —日本語会話教育を視野に入れて—

安 祥 希, 杜 長 俊

### I. はじめに

コミュニケーション・ストラテジーとしての「聞き返し」に関する従来の研究には、「聞き返し」を、聞き取りの問題を解決するため、もしくは、語句の字義的意味の理解に関する問題を解消するために用いられるものとする研究が多い。(1)と(2)はそれぞれ、聞き取りの問題と、語句の字義的意味の理解に関する問題が起きている場面の例である<sup>[1]</sup>。

(1) 1NS： 弟さん いま おいくつ↑

→2FS： ……お父さん↑

3NS： 弟さん→

4FS： 弟さん→

5NS： うん↓

(尾崎 1993：23 改)

(2) 1NS： 面接なのでは 緊張—するほうですか↑

→2FS： 緊張は何ですか↑

3NS： ドキドキしますか↑

4FS： ……うーん

(尾崎 1993：23 改)

このようななか、梅木 (2019) は、日本語教育への貢献を視野に分析を行い、聞き取りや字義的意味の理解の問題以外の目的で用いられる「聞き返し」が存在することを指摘している。たとえば、次のようなものである<sup>[2]</sup>。

(3) 0884B hh なんじゃワールド (.) っていうのを

0885A それ (.) パクってるよね? hhh

0886B いや

0887A hhh あったよね? なんか:

0888B [なんじゃワールド]

- 0889A [なんじゃタウン] みたいななかったっけ：  
0890B いや (.) なんじゃワールドですね  
→0891A え：なんじゃワールド：？ (梅木 2019：81)

(3)は、Bが自身が発案したと述べる新しいテーマパークの名前に関し、Aが「剽窃の疑念を抱いている（梅木 2019：81）」事例であり、梅木（2019）が「不審・不満」と呼ぶものである。会話の流れを見ても、聞き取りや字義的意味の理解の問題が生じているとは考えられないため、聞き取りや字義的意味の理解の問題以外の目的で用いられる「聞き返し」は確かに存在すると言える。梅木（2019）は、このような従来の研究が見落としてきた現象を指摘した点で大きな価値を持つが、そこで示されている体系には問題も多い。

以上を踏まえ、本稿では、梅木（2019）が示した「聞き返し」の体系、及び、従来の研究が「聞き返し」の説明に用いてきた概念の批判的検討を通して、新たな体系の提案を行う。具体的には、「聞き返し」を説明するために用いられてきた「問題」という概念を拡張し、「相手発話の内容と自分の知識の間の齟齬を明示化する「聞き返し」というカテゴリーが設定できること、拡張した「問題」を処理すること（「訂正ストラテジー」）以外に、「円滑化のストラテジー」として用いられる「聞き返し」が存在することの2点を主張する。このような体系は、日本語教育において「聞き返し」を取り上げたい日本語教師にとっても扱いやすいものと考えられる。

以下、Ⅱ節では、「聞き返し」を扱っている先行研究を概観し、それらの問題点と本稿の立場を述べる。Ⅲ節では、「問題の所存」という概念を導入し、それに基づく「聞き返し」の分類と体系を示す。Ⅳ節では、日本語会話教育との関連から日本語会話授業で取り上げる際のひとつの考え方を示す。最後にⅤ節で、本稿の主張をまとめ、今後の課題を述べる。

## Ⅱ. 先行研究と本稿の立場

### 1. 先行研究の概観

コミュニケーション・ストラテジーとしての「聞き返し」に関する研究については、尾崎（1992, 1993, 2001）、トムソン木下（1994）、猪狩（1999）、尾崎・椿（2001）、横須賀（2001）、椿（2010）、梅木（2019）など、多くの蓄積があるが、本節では、本稿のテーマと特に関連の深い尾崎（1992, 1993, 2001）と梅木（2019）を取り上げる。

尾崎（1992, 1993, 2001）は、日本語学習者が接触場面で用いる「問題処理の方策（訂正ストラテジー）」としての「聞き返し」について分析を行った研究である。尾崎による一連の研究では、コミュニケーション・ストラテジーには、問題処理の方策である「訂正ストラテ

ジー」とコミュニケーションの効果をあげる方策である「円滑化のストラテジー」があり（尾崎 1993：21）、問題処理の方策としての「聞き返し」は「相手の話が聞き取れない、分からないという問題に直面し、それを解消するために相手に働きかける方策（尾崎 1992：252）」と定義される。また、「聞き返し」は、「先行する相手の発話の全体または一部を繰り返しているかどうか」によって「エコー型」と「非エコー型」に分けられ、エコー型はさらに相手の発話の繰り返しだけからなる「単純エコー型」と「エコー+ですか／何ですか」のような繰り返しに他の要素が加わる「複合エコー型」に分けられるという（尾崎 2001：83）。加えて、尾崎（2001：83）は、「聞き返し」は、それに対して「うん」「ええ」などの肯定表現で応じることのできる「確認型」と、相手に対して反復、言い替え、説明などの発話調整を求める「非確認型」に分けることができ、複合エコー型と非エコー型は確認型でも非確認型でも用いられるが、単純エコー型は、「形式的には「うん」と応じることが可能だから」すべて確認型になると述べている。以下に、尾崎（2001）が示している単純エコー型（(4)の「日本人？」）と非エコー・確認型（(4)の「仕事？」）の例を示す。

(4) 1 JF1： 日本人 たくさんいますか

→2 ETO： 日本人？

3 JF1： うん

→4 ETO： うー 仕事？

5 JF1： うん

6 ETO： うん

（尾崎 2001：82-83 一部抜粋）

コミュニケーション・ストラテジーとしての「聞き返し」に関する従来の研究は、上記の尾崎（1992）による「聞き返し」の定義を援用し、「聞き返し」を聞き取りや字義的意味の理解の問題を解消するために用いられるものとして扱う研究がほとんどである。しかし、そのなかで梅木（2019）は聞き取りや字義的意味の理解の問題以外の目的で用いられる「聞き返し」（「非問題処理の方策」としての聞き返し発話）が存在することを指摘し、「驚き」「不審・不満」「面白がり」「進行の催促」「時間稼ぎ」という意味・機能を提示している。個別の現象についての観察と検討はⅢ節以降に譲り、ここでは梅木（2019）が示している体系について確認を行う。

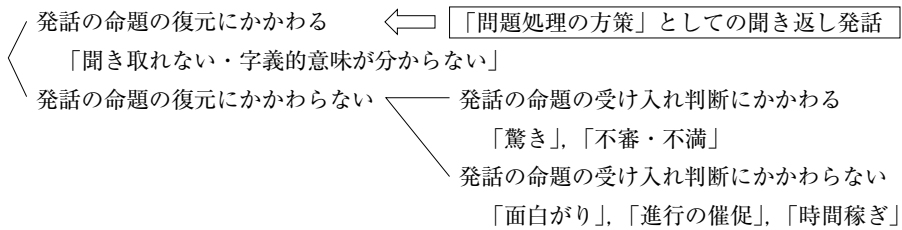


図1 聞き返し発話の意味・機能 (梅木 2019 : 75 改<sup>[3]</sup>)

梅木 (2019 : 71-72) によれば, 図1における「発話の命題の復元にかかわる」は, 「聞き返し発話の発話者が相手発話の命題を心内で復元できていない状態」を表すもので, 尾崎 (1992, 1993, 2001) における問題処理の方略としての「聞き返し」に対応する。一方, 「発話の命題の復元にかかわらない」場合は, 相手発話の命題を心内で復元 (確定) した後に移行する段階で, 命題内容の受け入れについて判断を行うとする。ここでいう「受け入れ判断」は, 談話管理理論 (田窪 1992 など) において仮定される「心的領域 (階層的なデータベース) に相手発話の情報を「登録できなかった」あるいは「登録された」状態」を踏まえたもので, 梅木 (2019 : 72) は以下のように説明している。

意味表示として復元された相手発話の命題の受け入れ判断にかかわる段階は, 復元の段階が済み, その情報を自分のデータベースに取り入れるかどうかを判断している状態であり, さらに意味表示として相手発話の命題の復元にも復元された相手発話の命題の受け入れ判断にもかかわらない段階とは, 意味表示として相手発話の命題の復元自体は済んでいる状態ではあるが, データベースに取り入れるかどうかを判断しているのではない状態を示す。

## 2. 先行研究の問題と本稿の立場

梅木 (2019) は, 新たな現象を指摘した点で評価されるが, その体系には問題がある。まず, 梅木 (2019) は, 「発話の命題の復元」と「命題の受け入れ」という2つの段階を設定し, 復元ができたのちに受け入れるかどうかという判断の段階に進むと述べているが, 会話における情報のやり取りのなかで, 梅木 (2019) のいう「判断」がその都度行われているとは考えにくく, 煩雑である。聞き取りや字義的意味の問題が生じれば, 当然心的領域への登録はできず, 聞き取りや字義的意味の問題が生じなければ, その情報は新規情報が登録される心的領域 (間接経験領域) に書き込まれると考えた方がシンプルである。加えて, 梅木 (2019) のいう「データベースに取り入れるかどうかを判断しているのではない

状態」というのがどのような状態を指すのかが定かではない。日本語教育現場での指導の参考にできる体系にするためには、よりシンプル、かつ、明瞭な体系を示す必要がある。

次節以降では、梅木（2019）が示したものを含め、具体的な現象について考察を行っていくが、Ⅲ節で取り上げる「聞き返し」は尾崎（2001）の言う単純エコー型に限定する。尾崎（2001）が、単純エコー型は確認型のみであるが、複合エコー型や非エコー型は確認型と非確認型を持つと述べているように、後二者については繰り返された部分以外の要素によって、「聞き返し」（及びその音声的な特徴）が示す発話意図とは異なる発話意図が加えられる可能性があるためである。たとえば、梅木（2019）の前身であり、エコー型の「聞き返し」のみを扱っている梅木（2011）は、大津（2004：47-48）が「わざと誤ったことや理不尽なことを言い、相手に対立表明をするように仕向けるという方法」として示した(5)の4Kをエコー型の「聞き返し」として取り上げている<sup>[4]</sup>。

- (5) 1F： カニ食べに行くの。  
 2K： あ 食べに行くの？  
 3F： うん。  
 →4K： 釣りに行くんじゃないの？  
 →5F：  
 K：  
 5F： ちゃう。つ： どうやって釣るの：。 →  
 K：  
 5F： カニって釣れるんですか：？  
 6K： 知りません。 (大津 2004：48<sup>[5]</sup>)

しかし、(5)については、大津（2004：48）が「カニを釣りに行くということが一般的ではないうえにカニが釣れるものなのかどうかも疑わしい。そのようなナンセンスを言うことでKは「ボケ」ている」と述べるように、2Kの単純エコー型の「聞き返し」で確認を行ったのちに、「食べ」を「釣り」に変更することで「ボケ」という全く異なる意図の発話を行ったと考えることが妥当である。このように、「聞き返し」の中核となる意味・機能にアプローチするためには、他の発話意図が含まれない単純エコー型の「聞き返し」に限定して議論を行う必要があると考えられるため、「聞き返し」の体系について議論を行うⅢ節では、「聞き返し」の先行発話の命題内容に関わる操作を含まない単純エコー型の「聞き返し」のみを取り上げることとする。

### III. 「問題の所存」に基づく「聞き返し」の分類と体系

西阪（2007）は「聞き返し」（西阪2007では「部分的繰り返し」）が扱うトラブルには次の4つがあるとしている。

- 1) 聞き取りの不確かさ
- 2) 間違い（言い間違い、勘違い）の可能性
- 3) その表現の意味の不確かさ
- 4) その表現を含む発話全体の意味の不確かさ

1) と3) は、「聞き返し」を行う話者が先行発話の聞き取りや字義の意味が分からなかった場合、すなわち、従来の研究における問題処理の方策としての「聞き返し」であると考えられる。一方、2) と4) は、先行発話の聞き取りや字義の意味の解釈に問題はなかったが、当該の会話の流れでなぜそのような発話が行われたのかが分からないといった場合を含むものである。つまり、尾崎（1992：252）による問題処理の方策（訂正ストラテジー）としての「聞き返し」の定義は「相手の話が聞き取れない、分からないという問題に直面し、それを解消するために相手に働きかける方策」であったが、このなかの「相手の話が分からない」には、「聞き返し」を行う話者が、①自身に問題があると捉えるものと、②会話の流れや一般知識に照らして先行発話（相手）に問題があると捉えるもの、の2つがあるのである。

上記のような「聞き返し」を行う話者に生じた問題の帰属先を「問題の所存」と呼んだ場合、それに基づく「聞き返し」の分類と体系は表1のようになる<sup>[6]</sup>。

表1 「聞き返し」を行う話者から見た「問題の所存」に基づく「聞き返し」の分類

ストラテジー	問題	問題の所存	意味・機能
訂正ストラテジー (問題処理の方策)	聞き取りや字義の意味の理解	自分	「聞き取りの確認」 「字義の意味の確認」
	相手発話の内容と 自分の知識の間の齟齬	相手	「驚き」 「不審・不満」
円滑化の ストラテジー	問題なし	—	「興味・関心」 (=「面白がり」) 「進行の催促」

表1のうち、「問題の所存」が「聞き返し」を行う話者自身（自分）になるものは、従来の研究が扱ってきた、聞き取りや字義の意味の理解に関する問題を解消するための「聞き返し」に対応するため、以下では、相手発話の内容と自分の知識の間の齟齬を明示化する「聞き返

し], 円滑化のストラテジーとしての「聞き返し」を順に確認していく。

### 1. 相手発話の内容と自分の知識の間の齟齬を明示化する「聞き返し」

相手発話の内容と自分の知識の間の齟齬を明示化する「聞き返し」は, 先述のように, 「聞き返し」を行う話者が当該会話の流れや一般知識に照らして先行発話(相手)に問題があると捉えるものである。

このカテゴリーの典型的な例が梅木(2019)の言う「驚き」である。

- (6) 0287B 40分ぐらい  
0288A hhhh  
0289B 味噌ラーメン  
0290A 長いこと:  
0291B 何なら閉めかけたんじゃないかってところから  
0292A hhh  
0293B 必死に作っていただきました  
→0294A お:なるほどね:>けっこう夜遅かったの:<  
0295B 昼ですよ昼  
→0296A 昼?  
0297B うん(.)正にランチタイム(.)1時とか  
0298A あ:そう  
0299B うんだから超あの:食べたんでしょうね30人ぐらいだからいっぱい来て  
0300A あ:なるほどね (梅木2019:76)

梅木(2019:76)は(6)について「0296A「昼?」という聞き返し発話は, 0294Aに「>けっこう夜遅かったの:<」があることから, 発話者が発話時において直前の相手発話とは異なる想定を持っており, 直前の相手発話の命題の受け入れに対する判断において, そのまま受け入れられなかったこと, つまり, 「驚き」と見なし得る」と述べている。しかし既に述べたとおり, 聞き取りや字義的意味の理解の問題が生じなければ, 会話のなかで得られた新規情報は間接経験領域に登録されると考えた方が妥当である。このように考えた場合, (6)において「聞き返し」を行う話者であるAは, それまでの話の流れから「味噌ラーメンを作っていた」のは「夜」であると予想していたため0294Aの発話に至ったが, 続く0295Bでそれに反する回答があった, すなわち, 相手発話の内容と自身の間接経験領域にある情報

に基づく予想の間に齟齬が生じたため、それを明示化する「聞き返し」を行ったと解釈される。

(6)は現在進行中の会話から得られた情報との間に齟齬が生じるケースであるが、次に示す(7)は「聞き返し」を行う話者が持つ一般知識との間に齟齬が生じるケースである<sup>[7]</sup>。

(7) 【朝ごはんについて】

- 01J1 昨日は？  
02L2 昨日はい昨日オートミールを食べました朝ごはんに  
03J1 何を食べました？  
04L2 オートミール  
05J1 ああれミルクを入れて食べるやつ？  
06L2 はいはいはい  
07J1 ヘルシーですね分かりました  
08 私は：朝はジュース  
→09L2 ジュース？ジュースだけ？  
10J1 ジュースとパン (.)  
11 えっとジュースはパイナップルとリンゴ  
12 パイナップルとリンゴをグ：ツミックスして飲みます

(7)は日本語話者J1と学習歴がそれほど長くない日本語学習者L2の間の会話である。(7)において、L2はJ1が自身の朝食について述べた07J1「私は：朝はジュース」に対して08L2「ジュース？」という「聞き返し」を行っているが、直後に「ジュースだけ？」という発話が続くことから聞き取りや字義の意味について問題が生じているのではないことがわかる。また、「聞き返し」の対象となる先行発話より前の会話ではL2の昨日の朝食が話題になっており、L2が「オートミールを食べました」と発言していることから、L2は朝食に関して「何らかの食物を食べる」といった認識を持っていると捉えられる。しかし、これは会話の相手であるJ1の発話から得たものではなく、L2自身の認識に基づいたものである。よって、08L2「ジュース？」という「聞き返し」は、L2が朝食に対して持つ一般知識「何らかの食物を食べる」と、J1の発話「朝食をジュース（飲料）だけで済ます」の間に生じた齟齬に対する「驚き」を明示化するために用いられたと考えることができる。

次は「不審・不満」の例である。

(8) 0884B hh なんじゃワールド (.) っていうのを



- 0885A それ (.) パクってるよね? hhh  
0886B いや  
0887A hhh あったよね? なんか:  
0888B [なんじゃワールド]  
0889A [なんじゃタウン] みたいななかったっけ:  
0890B いや (.) なんじゃワールドですね  
→0891A え: なんじゃワールド: ? (再掲 (3): 梅木 2019: 81)

(8)は、Bが自身が発案したと述べる新しいテーマパークの名前に関し、Aが「剽窃の疑念を抱いている(梅木 2019: 81)」とする事例であり、梅木(2019: 81-82)は、「0885A「それ (.) パクってるよね? hhh」, 0887A「hhh あったよね? なんか:」, 0889A「[なんじゃタウン] みたいななかったっけ:」といった、相手発話の命題の受け入れに対し抵抗する表示が見られる」ことから、「AがBによる直前の発話をそのまま受け入れているとは考えにく」と述べている。しかし、このような事例に関しても「聞き返し」を行う話者であるAの知識とBの発話の間に齟齬が生じたという解釈が可能である。また、先の「驚き」は会話のなかで齟齬が生じた直後に発せられるのに対し、「不審・不満」は情報に関する交渉の末に発せられるのがデフォルトであると考えられる。そのため、両者は同じ相手発話の内容と自分の知識の間の齟齬を明示化する「聞き返し」というカテゴリーに属するが、「不審・不満」は特定の条件の下で発せられるものということになる<sup>[8]</sup>。

ここまで見てきた「驚き」「不審・不満」と、聞き取りや字義的意味の理解に関する問題を解消するための「聞き返し」は、ともに訂正ストラテジー(問題処理の方策)に位置付けられるが両者には違いがある。

一つは訂正要求の強さである。聞き取りや字義的意味の理解に関する問題を解消するための「聞き返し」は、冒頭で示した(1)と(2)のように、その「問題の所存」が「聞き返し」を行う話者自身にあるということを示して先行発話の話者(相手)に訂正を求めるものである。そのため、このような「聞き返し」の場合には、「聞き返し」があった直後に修復(西阪 2007)やメタ的な調整作業(田窪 1992)と呼ばれる問題部分の訂正に話題が移行する。一方、「驚き」「不審・不満」は、それぞれに示し方の違いはあるものの、相手の先行発話と自分の知識に齟齬があったことを示すことに目的があり、必ずしも訂正を求めるものではない。たとえば、(6)において、BはAに「聞き返し」をされた直後の0297Bで「うん (.) 正にランチタイム (.) 1時とか」のように「うん」と反応してAの理解が間違っていないことを示したのちに追加説明に移行している。ここから、BはAに聞き取りや字義的意味の理解に関する

問題が生じておらず、訂正を行う必要性を感じ取っていないことが分かる。(7)においても、L2の「聞き返し」に対してJ1が「ジュースとパン」のように情報を付け加えていることから、J1はL2の「聞き返し」を聞き取りや字義的意味の理解を問題としたものではなく、朝食に関する一般知識を問題としたものであることを理解していることが読み取れる。実際、これらの例においては、「聞き返し」の後で問題部分の訂正は行われていない。また、(8)は「聞き返し」で事例が終了しているため、その後の反応を分析することはできないが、AがBから「なんじゃワールド」という発話を聞いた直後の0885Aで「それ (.) パクってるよね？ hhh」と反応していることから、Aは「なんじゃワールド」を正確に聞き取れており、話の流れも理解していることが分かるため、0891Aの「聞き返し」の後で語句に関する訂正が行われたとは考えにくい。以上のような「聞き返し」に対する受け手の反応は、(6)~(8)のような相手発話の内容と自分の知識の間の齟齬を明示化する「聞き返し」が会話の中で問題が生じたことを示すものではあるものの、聞き取りや字義的意味の理解に関する問題を解消するための「聞き返し」のように語句の訂正を強く求めるものではないということを示していると捉えられる。

もう一つの違いは音声的な特徴である。梅木(2019)は、聞き取りや字義的意味の理解に関する問題を解消するための「聞き返し」と「驚き」「不審・不満」のピッチ変動を比較し、聞き取りや字義的意味の理解に関する問題を解消するための「聞き返し」が通常の上昇調で用いられるのに対し、「驚き」は急激な上昇を、「不審・不満」は緩やかな上昇を伴うことを指摘している。よって、「驚き」「不審・不満」は、聞き取りや字義的意味の理解に関する問題を解消するための「聞き返し」に対し、それぞれが独自の音声的な特徴を持っていると言えるが、これは、「問題の所存」が相手にあることを示す「驚き」「不審・不満」では、相手の発話によって生じた齟齬を、「聞き返し」を行う話者がどのように捉えているかという点について明確にする必要があるためであると考えられる。

## 2. 円滑化のストラテジーとしての「聞き返し」

ここで言う「円滑化のストラテジー」は、「コミュニケーションの効果をあげる方策(尾崎1993)」であり、「聞き返し」を行う話者自身にも、相手発話と自分の知識の間にも問題が生じているとは捉えられないもの(表1における「問題なし」)が含まれる。

まずは「興味・関心」を見る。これは梅木(2019)の言う「面白がり」に対応するものである。

(9) 1338B 火バサミ (.) 火バサミってあるじゃない

- 1339A hhhh 火バサミね  
1340B 火バサミの  
1341A うん  
1342B かたっぽのハサミの方に  
1343A うん  
1344B ボックスがついてんのよね  
→1345A hhhhh ボックスがついてんの？  
1346B うん  
1347A うん  
1348B だから拾ったものすぐ（.）ボックスに  
1349A ボックスに hhhh  
1350B 入れれるっていう  
1351A あ：そうそれ何どんなものでも拾えんの？それは (梅木 2019 : 92)

(9)における「聞き返し」である 1345A は、「hhhhh」のように直前に笑いが生じていること、「聞き返し」のあとに訂正が行われないことから、聞き取りや字義的意味の理解の問題が生じているとは捉えられない。また、1345A における「聞き返し」直前の笑いや 1347A、1349A の反応から、A の知識と B の発話の間に齟齬が生じているとも捉えられない。梅木 (2019 : 91-92) は、「面白がり」について、「我々が会話をする際のことを考えると、命題をそのまま受け入れるかどうか（共有の可否）に対する判断のみに常に注意を向けているわけではなく、「会話参加者の一方が相手の発話を受け入れるか否かにかかわらず（それは横に置いておいて）、相手発話そのものに対して面白がっているような場合がある」と述べる。しかし、繰り返し述べているように、聞き取りや字義的意味の理解の問題が生じなければ会話のなかで得られた新規情報は間接経験領域に登録されるものであるうえに、「相手の発話を受け入れるか否かを横に置いておく」ということがどのような認知的な状態を指すのか不明である。また、そもそも相手発話の情報が自分の心的領域に登録されなければ、それを面白がるという反応もできないであろう。以上にに基づき、このような例は梅木 (2019) が述べる「意味表示として相手発話の命題の復元自体は済んでいる状態ではあるが、データベースに取り入れるかどうかを判断しているのではない状態」にあることを示すものではなく、単に「相手発話の情報に対する興味・関心を示す」ものであると考えるため、本稿では、これを「興味・関心」と呼んでいる。

次は「進行の催促」の例である。

- (10) 0072B 夏の祭典みたいな  
 0073A はいはいはい  
 0074B コンビニめっちゃ貼ってあるんだよねなんかあれポスター  
 0075A あっそすごかったなん：こんくらい？超厚い（.）もの？  
 0076B うん  
 0077A 6本の1冊なんだろう本物の6本？  
 0078B はいはい（…）  
 0079A の1冊分ぐらいのカatalogだった  
 0080B h何？入ったのあの：キャラの：（.）（.）あ違うか  
 0081A うん買いに行った  
 0082B 同人誌  
 0083A 買いに行って  
 →0084B 買いに行って？  
 0085A であ：その中に書いてあんのは：なんかサークルさん？

（梅木 2019：96 一部抜粋）

「進行の催促」について、梅木（2019：97）は「直前の発話が問題となっているというより、聞き返し発話を行うことで「それで？」のように、相手に次の発話を述べることを求めたと見なし得」、また、「聞き返しの対象となっているのは相手の発話であるが、聞き返し発話によって表示されている疑問の焦点はその発話（聞き返し発話の対象となっている相手の発話）ではなく、その後の相手の発話である」と述べる。上昇調が表す疑問の焦点がその後の相手の発話にあるという「進行の催促」の特徴について、梅木（2019）は先行研究を引用しながら、「で？」「たとえば？」「というと？」などとの関連で説明を行っているが、ここで重要なのは、先行発話が従属節で終わっているという点と、その従属節を繰り返しているという点であろう。これは「A：買いに行ったから→B：買いに行ったから？」「A：買いに行ったけど→B：買いに行ったけど？」のような他の接続助詞を用いた会話でも、同様に「進行の催促」が成立することからも明らかである。また、機能的な側面から見た場合、「進行の催促」は、「興味・関心」と同様、「相手発話の情報に対する興味・関心を示す」ことを行っていると考えられる。つまり、「進行の催促」は特定の形式（主節に至る前の従属節）に支えられた「興味・関心」の派生形であると位置づけられるのである。

このように、「興味・関心」と「進行の催促」はいずれも「相手発話の情報に対する興味・関心を示す」という機能を果たすという点で、相手とのコミュニケーションの効果をあげて

いる、すなわち、円滑化のストラテジーとして機能していると捉えられる。ここで問題となるのが、訂正ストラテジーと円滑化のストラテジーという異なるコミュニケーション・ストラテジーに、同じ「聞き返し」という形式が用いられるのはなぜか、という点であるが、これは、先行する相手の発話の全体を「繰り返せる」ということによって示される「相手の話を聞いていた」ということが、分からなかった部分について尋ねているとも、興味・関心を持った部分についてさらに尋ねているとも解釈できるためであると考えられる。

#### IV. 日本語教育と「聞き返し」

日本語教育において扱われる「聞き返し」は、本稿がここまで取り上げてきた単純エコー型の「聞き返し」よりも、以下のような定型句が中心である。

- (11) え？もう一度／もう一度、お願いします。／もう一度、言ってください。  
シュウカツって何ですか？／シュウカツってどういう意味ですか？  
ちょっと速いですが…／ゆっくりお願いします。／もう少しゆっくり話してください。  
(吉田 2006 : 12)

学習者の日本語運用力が低い場合は、聞き取りや字義的意味の理解の問題が生じることが多く、また相手に簡単なことばを用いて問題を解消してもらう必要があるため、問題が生じていることを端的に伝えるこのような定型句を早い段階で学習させるのは妥当な指導である。しかし、このような定型句には、上記のような利点がある反面、問題が生じたことを端的に表し過ぎる、会話の流れを完全に止めてしまうという欠点もある。そのため、円滑なコミュニケーションの実現という観点で見た場合には、日本語が上達して聞き取りや字義的意味の理解の問題が徐々に少なくなってきたら、他の形式に置き換えていく必要がある表現であるとも言える。

それでは、本稿で扱った単純エコー型を含むエコー型の「聞き返し」が上記のような定型句よりも使用しにくいのかと言えば、そうではない。これは、本稿でデータとして取り上げた日本語学習歴がそれほど長くない学習者でも、(7)に示したような「聞き返し」を使用できていることから明らかである。以下に、類例を示す。

- (12) 【食べ物について】（「聞き取りの確認」：単純エコー型）

01L1 えそうえ：どりやどんな料理が好きですか？

02J1 私？急に？hhhh 私え：っと何が好きなのかな（.）え：っと鶏肉？

唐揚げってわかりますか？唐揚げ

→03L1 からあげ？いいえ

04J1 唐揚げはえっと日本の食べ物ね

(13) 【外国語について】（「驚き」：複合エコー型）

01L1 え：どんな外国語を話しますか？

02J2 あそうですね（.）英語を少しとあとは韓国語？

→03L1 韓国語：ですか？

04J2 韓国語を少し勉強しました [でも少し]

05L1 [韓国語韓国語は難しいです難しい]

06J2 う：んそうですねあの：え：っと文字が違います

07 から難しいです

08 日本語もひらがなカタカナ漢字あります

09 え：韓国語はハングル？文字という文字が覚えなければなりません

10 からちょっと難しいです

(14) 【歌について】（「興味・関心」：複合エコー型）

01J4 お：じゃアイドルの曲とかも聞きますか？

02L2 アイドル：ふ：んも時々

03J4 え：私も：歌が大好きなんです

→04L2 あ：J3さんが歌が大好きですか？

05J4 [(…)]

06L2 [な、な、何の何の種類？]

07J4 う：ん私は（.）日本のアイドルが大好きで（.）男のアイドル？

08L2 男のアイドル

09J4 ジャニーズ？知ってますか？

10L2 ジャニーズ知りませぬごめんなさい

上記の例には、梅木（2019）ではじめて指摘されたようなタイプの「聞き返し」も含まれているが、日本語学習歴がそれほど長くない学習者が多様な「聞き返し」を使いこなしているという事実は、これらのタイプの「聞き返し」が様々な言語に共通して存在していることを示唆している。このような観点から見た場合、表1に示した「聞き返し」については、特別に取り上げて指導する必要はないのかもしれない。しかし、梅木（2019：159）が「教育的応用に向けた研究成果の位置づけについては、A. 学習項目として教えることを目的に行わ

れるものと、B. 教えること、に結果的にはなるが、需要が生じたときに提示できるように「備え」しておく必要があるものの2つが想定されると述べるように、学習者の疑問に答えられるような研究を蓄積しておくことは重要である。様々な「聞き返し」の意味・機能の網羅的な提示と、教育への応用を視野に入れた体系化を目指した本稿の成果が貢献することがあれば幸いである。

## V. 本稿のまとめと今後の課題

本稿では、コミュニケーション・ストラテジーとしての「聞き返し」には、従来の研究が扱ってきた聞き取りや字義の意味の理解に関する問題を解消するための「聞き返し」のほかに、相手発話の内容と自分の知識の間の齟齬を明示化する「聞き返し」と円滑化のストラテジーとしての「聞き返し」が存在するということを主張した。これらは「聞き返し」を行う話者に生じた問題の帰属先である「問題の所存」というシンプルな概念で体系化できる（順に、問題の所存：自分、相手、問題なし）ため、日本語教育において「聞き返し」を取り上げたい日本語教師にとっても扱いやすい体系となっていると考えている。

一方で課題も残される。本稿では、先行する相手の発話の全体を上昇調で繰り返す単純エコー型の「聞き返し」のみを対象としたが、日本語教育において取り上げられる定型句を含む他の形式の「聞き返し」でも本稿の分類と体系が有効に機能するか、という点については別に検討を行う必要がある。また、学習者の「聞き返し」が本来の意図とは違い上手く機能しない、相手に意図が伝わらない場合がある。たとえば、次のような例である。

### (15) 【日本語学習の期間について】

- 01J3 日本語はどれくらい勉強してるんですか？何年間勉強してますか？  
→02L1 何年間？  
03J3 はい日本語の学習は何年間（.）やっていますか？  
04L1 え：え：くくきゅがつきゅがつ  
05J3 くが九カ月  
06L1 えいは：え：ご5月にえ：え：え：行きたいです5月5月  
07J3 5月に日本に来る予定ですか？  
08L1 そうですねえ：い：え：How to say う：ん  
09 わかりませんすみませんわかりません  
09J3 hhh 大丈夫です（.）すごい日本語上手ですね

(15)において、L1は「何年間」の字義的意味が分からず、訂正ストラテジーとして「聞き返し」を用いているが、J3は自身の質問を繰り返すのみであったため、結局、08L1は会話の継続を諦めている。この事例のような食い違いが生じる原因は何で、それはどのような場面なのか、という点に関する調査・分析も望まれる。いずれも今後の課題としたい。

## 注

- [1] 尾崎 (1993) では、学習者の「聞き返し」に対する母語話者側の応答 ((1) 反復, (2) 説明) について述べている事例である。
- [2] 本稿で示すデータ及び梅木 (2019) からの引用については、梅木 (2019) の文字化記号を用いる。文字化に使用した記号については稿末を参照されたい。
- [3] 梅木 (2019) の図 4.2 (p. 75) から頻度情報を削除し、図 4.1 (p. 72) の情報を加えている。
- [4] 梅木 (2019) はエコー型の「聞き返し」に限定してはいないが、同じ例を引用している。
- [5] 大津 (2004) で用いられているトランスクリプトのうち、(5) に関与するものは以下のとおりである。「語尾が下がって区切りがついた」「? 語尾の音が上がっている」「: 直前の音が伸ばされている」「行末の→ 相手発話と重なっているが、発話が継続している」「ハ 笑い」「波線 笑いながらの発話」「複数行にまたがる括弧 会話の重なり」。
- [6] 梅木 (2019) が挙げる「時間稼ぎ」の例は、字義的意味の理解に関する確認に隣接すると思われる話題に関する確認と捉えられたり、「不審・不満」と捉えられたりするようなものである。よって、「時間稼ぎ」についてはその存在から検討を行う必要があるため、表 1 では梅木 (2019) の「時間稼ぎ」は除外している。
- [7] 本稿で取り上げるデータのうち、出典を示していない会話例は、学習院大学の国際センターに協定留学を希望する大学生 (日本語学習経験がないか少ない) を対象に開講している「日本語準備コース (Japanese Language Preparatory Course)」におけるビジターセッションの会話資料から取り出したものである。ビジターセッションは、2021 年度のコースに参加した日本語学習者 2 名 (L1, L2) と、日本語教師 (J1, J2)、日本人大学生 (J3, J4) により遠隔で実施された。「L1 と J1/J2/J3」「L2 と J1/J2/J4」のそれぞれ 3 回、計 6 回行われた。その中から「聞き返し」が見られたところを抜粋している。
- [8] 相手発話の内容と自分の知識の間の齟齬を明示化する「聞き返し」については、実例を得るのは困難ではあるものの、次のような「嘲笑い」と呼べるものも想定される。
- (i) 01A 明後日締め切りのレポートあるじゃん?  
02B うん  
03A 書いた?  
04B もうできてるよ  
05A そうなんだ↓いいな: 私それまだ始めてもないの↓  
→06B ((笑いながら)) 始めてもないの? もうだめなんじゃない? (作例)
- このような例も、「締め切り近くになればなるほど作業は進んでいるはず」という「聞き返し」を行う話者である B の想定と、「まだ始めてもない」という A の発話の間に齟齬が生じたと捉えることができるが、「驚き」との違いは「笑いを伴う」という点である。実際、6B は笑いながらの発話でなければ「驚き」として解釈されるだろう。

## 参考文献

猪狩美保 (1999) 「初級日本語学習者の「聞き返し」のストラテジー——初級日本語教科書との関連から——」『横浜国立大学留学生センター紀要』6号, pp. 15-25, 横浜国立大学留学生センター



- 梅木俊輔 (2011) 「エコー型聞き返しの発話機能と発話末イントネーションとの関係」『日本語／日本語教育研究』2号, pp.119-136, ココ出版
- 梅木俊輔 (2019) 『聞き返し発話の解釈に関する認知語用論的考察』, 日中言語文化出版社
- 大津友美 (2004) 「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス——「遊び」としての対立に注目して——」『社会言語科学』6巻2号, pp.44-53, 社会言語科学会
- 尾崎明人 (1992) 「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」カッケンブッシュ寛子・尾崎明人・鹿島央・藤原雅憲・糀山洋介 (編) 『日本語研究と日本語教育』 pp.251-263, 名古屋大学出版会
- 尾崎明人 (1993) 「接触場面の訂正ストラテジー——「聞き返し」の発話交換をめぐる——」『日本語教育』81号, pp.19-30, 日本語教育学会
- 尾崎明人 (2001) 「接触場面における在日ブラジル人の「聞き返し」とその回避方略」『社会言語科学』4巻1号, pp.81-90, 社会言語科学会
- 尾崎明人・椿由紀子 (2001) 「電話会話における初級日本語学習者の「聞き返し」と「聞き返し」回避」『日本語・日本文化論集』9号, pp.25-45, 名古屋大学留学生センター
- 田窪行則 (1992) 「談話管理の標識について」文化言語学編集委員会 (編) 『文化言語学——その提言と建設——』 pp.1110-1097, 三省堂
- 椿由紀子 (2010) 「コミュニケーション・ストラテジーとしての「聞き返し」教育——実際場面で使用できる「聞き返し」をめざして——」『日本語教育』147号, pp.97-111, 日本語教育学会
- トムソン木下千尋 (1994) 「初級日本語教科書と「聞き返し」のストラテジー」『世界の日本語教育』第4号, pp.31-43, 国際交流基金日本語国際センター
- 西阪仰 (2007) 「繰り返して問うことと繰り返して答えること——次の順番における修復開始の一面——」『研究所年報』37号, pp.133-143, 明治学院大学社会学部附属研究所
- 横須賀柳子 (2001) 「情報取りにおける聞き手のストラテジー」『ICU日本語教育研究センター紀要』10号, pp.41-57, 国際基督教大学
- 吉田さち子 (2006) 「初級教材『みんなの日本語』における聞き返しについて」『留学生センター年報』2006-2007, pp.5-14, 鹿児島大学

## 文字化の記号

- [ 発話や音声为重なり始めた時点を示す。  
] 発話や音声の重なりが終了した時点を示す。  
(.) ごくわずかの感知可能な間隙があることを示す。  
: 直前の音が引き伸ばされていることを示す。  
? 直前部分が上昇調の抑揚で発話されていることを示す。  
↓ 直後の部分で急激に音が低くなっていることを示す。  
文字 強調されて発話されていることを示す。  
hh 呼気音を示す。呼気音の相対的長さはhの数で示す。「ため息」「笑い」などいくつかの種類  
の異なるふるまいを示す。  
<文字> 前後に比べてゆっくりと発話されていることを示す。  
>文字< 前後に比べて速く発話されていることを示す。  
(…) 全く聞き取れない発話であることを示す。  
行頭の→ 分析において注目する行を示す。  
行末の→ あいづちなど相手の発話が一時的に重なっているが、発話が継続あいづちなど相手の発話  
が一時的に重なっているが、発話が継続していることを示す。

(アン サンヒ 元学習院大学国際センター外部コーディネーター兼非常勤講師)  
(ト チョウシュン 元学習院大学国際センター准教授)

# How to Perceive the “Problem” in “Clarification Requests”: With a View to Japanese Conversation Education

Sanghee Ahn, Changjiun Du

## Abstract

In this paper, we argue that “clarification requests” as a communication strategy include not only those that are to solve problems related to listening comprehension and understanding of literal meanings of words and phrases, which previous studies have dealt with, but also those that are to clarify discrepancies between the content of the addresser’s speech and addressee’s knowledge. We also argue that we also use “clarification requests” as a strategy for facilitating communication. These requests can be systematized based on the simple concept of “problem presence”, which is the source of the problem identified by the party who makes “clarification requests” (the requesting party, the other party, or no problem). Therefore, the system is considered easy to handle even for Japanese language teachers who would like to take up “clarification requests” in Japanese language education.